

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02205

研究課題名(和文)モダニズム期のイディッシュ文化圏における表象文化の研究

研究課題名(英文) Study on representational culture in the Yiddish cultural area during the modernist period.

研究代表者

樋上 千寿 (HINOUE, Chitoshi)

京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：30608740

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：海外調査では、近年発見された1910年前後のウクライナ・ヴィルナで録音された音源アーカイブの分析から、従来空白状態だったモダニズム期のイディッシュ文化圏でのイディッシュ音楽の実態がより明瞭となった。またポーランド起源のポルカとユダヤ人楽師によるポルカの比較から、「ホスト文化のユダヤ化」の一つのモデルが浮かび上がった。さらにイスラエルで共有されている「クレズマー音楽」のレパートリーが離散地でのそれと大きな相違があること、スタイルにも若干の相違があることが分かった。各年度に開催した音楽家のためのワークショップでは、ダンスとダンス音楽の関連性について実演を通じて理解を共有できた。

研究成果の概要(英文)：Analysis of sound source archives recorded in Vilna, Ukraine around 1910 which has been recently found has made actual condition of Yiddish music in the Yiddish culture sphere during the modernist period clearer than ever. Recording in Eastern Europe this period had been considered to had been almost lost. Furthermore, one model of 'Judaization of host culture' emerged from a comparison between Polka originating in Poland and Poyln (Jewish Polka) by Jewish musician. And it turned out that the repertoire of "Klezmer music" shared in Israel has a big difference from that in the eastern European diaspora area and there are also some differences in style. In the workshops for mainly musicians which had held in each year, it was a great accomplishment that they were able to share their understanding about the relevance of dance and dance music through demonstration.

研究分野：西洋美術史、ユダヤ文化史、クレズマー音楽

キーワード：東欧ユダヤ教 イディッシュ クレズマー音楽 モダニズム

1. 研究開始当初の背景

欧米でのイディッシュ音楽研究は、演奏家によるものが中心となっている。つまり 1970 年代後半以降の米国でのイディッシュ音楽復興期に演奏家自身がアーカイヴに積極的にアプローチし、あるいは伝統保持者への聞き取りなどによりその伝統の本質理解に努めたことが、イディッシュ音楽の再生と発展に寄与した。一方、我が国では約 20 年前からクレズマー音楽の演奏は一部の演奏家によって試みられてはいるものの、本質的研究は未開拓であると言わざるを得ない。そのため国内におけるクレズマー音楽の演奏実態は、未だ恣意的な解釈によるものに留まっており、それが社会の一部で無批判に受容されている。このような表層的な理解や誤解が、急速に進む国際化の中で、異文化や多様性への理解に好ましくない影響を及ぼすことが懸念されている。近年ネットでの音楽配信の普及により、国内でも多様な音楽に触れる機会が急激に増えたことに伴い、演奏家側からイディッシュ音楽に関する情報を求める動きも加速してきた。そのため社会への発信者である演奏家間で情報を共有するために、欧米の指導的な演奏家を招聘し、我が国において演奏家を対象とするワークショップを継続的に開催し、イディッシュ音楽の本質的理解を進め、より広範に社会へ還元する機会を設ける必要を痛切に感じるようになった。

2. 研究の目的

イディッシュ文化(東欧ユダヤ教伝統)の本質理解によって、東欧ユダヤ・モダニズムの革新性理解に新たな視座を設定することが本研究課題を含む長期的な研究目標である。イディッシュ文化圏の表象文化理解には、言語文化としての音楽文化を総合的に研究することが効果的であり、具体的な理解を得やすいため、特にイディッシュ音楽の本質理解を促進させることを優先する。つまりユダヤ教伝統音楽とイディッシュ音楽の親近性、イディッシュ音楽と周辺地域の民族音楽との接触と影響関係、さらにはハスカラ期以降のイディッシュ音楽と近代音楽の関わりを明らかにする。イディッシュ音楽の可塑性、柔軟性、そして多国籍性を理解することは、エコール・ド・パリで開花することになる東欧ユダヤ・モダニズム美術の革新性理解にも有効と考えられるからである。

3. 研究の方法

イディッシュ文化の伝統理解と研究成果の共有を目的とした研究例会を定期的で開催する。またドイツ・ワイマールで開催されるイディッシュ文化に関する総合的なワークショップ Yiddish Summer Weimar に参加し、情報交換と資料収集を行い、理論・実践両面からイディッシュ文化の研究を進める。その成果を社会に還元するための研究発表会(レクチャー・コンサート)を各年度国内 2 箇所

で開催する。2 年次と 3 年次には海外から演奏家を招聘し、主に演奏家と音大生を対象としたワークショップを行う。その成果をコンサート開催と記録資料の公開により社会に還元する。

4. 研究成果

(1)「音楽家のためのイディッシュ・ダンス・ワークショップ」(2015 年 11 月 22 日)
東欧ユダヤ音楽の多くの部分を占めるダンス音楽には「ホラ」「フレイラハス」「ブルガール」などの種類があり、使われる旋律や曲調には類似点が多いが、実際に踊られるダンスそのものには相違点が多く、また踊られる場面や踊りに込められた意味も大きく異なる。ワークショップでは主に演奏家を対象として、これらのダンスを実践してもらった後、それぞれのダンス曲の演奏にも挑戦してもらい、その特徴の違いを身体と耳と頭で理解することを目指した。また各種ダンスについて参考資料を配布し、解説を行った。ダンス指導は吉田佐由美氏が担当し、演奏はオルケステル・ドレイデルのメンバーが主導した。

(2)「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会 - シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.9」(2015 年 11 月 23 日)

第 1 部では、各種のダンス音楽にフォーカスし、「ターキッシャー」「ホラ」「ブルガール」「シェーア」などの代表的な楽曲を、解説を交えて演奏した。「ホラ」と「ブルガール」では、前日のワークショップ参加者や演奏会の聴衆が吉田佐由美氏のリードにより、ダンスの実践に参加した。ワークショップ同様、曲調の似たダンスでもステップがどのように異なり、それが如何に微妙なノリの違いを生み出すのかを体験を通して理解を共有した。第 2 部では、クレズマー音楽のもう一つのジャンルである非ダンス系の楽曲「ドイナ」「ドブリジェン」などを中心に演奏した。近年 EMI (旧グラモフォン・レコード) のアーカイヴから、19 世紀末～第 1 次世界大戦前の東欧での録音約 15,000 曲が発見され、その分析が進められてきた。2015 年夏これらの楽曲の一部が Renair Records より“Chekhov's Band-Eastern European Klezmer music from the EMI archives 1908-1913”として詳細な解説冊子とともにリリースされた。長らくこの時代の欧州での録音資料は殆ど存在しないと知られてきたが、この膨大なアーカイヴ発見によりユダヤ人の米国大量移住以前の東欧諸国でのクレズマー音楽の姿が明確に浮かび上がることとなった。2015 年夏の Yiddish Summer Weimar の指導者の一人であり、楽曲の分析に深く関わってきたジョエル・ルービン氏 (Joel Rubin, クレズマー演奏家、音楽学者) がアーカイヴの中から数曲を授業の題材として採り上げ、実演を通して理解することでその成果を参加者と共有した。このワークショップには日本から樋上千

寿、三代真理子、アンナ・グラデコヴァの3名が参加したが、その成果報告として、19世紀末にヴィルナのイディッシュ音楽界で多大な影響力を誇ったシュトゥッペル(Stupel)一族が録音した「シュトゥッペル・ドブリジェン〜フレイラハス」等を、解説を交えて演奏した。また「ルーマニア・ファンタジー」をグラデコヴァのヴァイオリン(ピアノ伴奏:大橋祐子)により演奏した。これまでの成果発表会では紹介することが出来なかったイディッシュ・ヴァイオリンの名曲を生演奏で聴衆に届けることが出来た。

成果

本研究は、異文化理解への望ましい方法論を追究する長期計画の一過程に過ぎない。実際十余年に亘る研究の成果として、東欧ユダヤ音楽に対する正しい理解が劇的に進んだとは言えない。その理由として、依然として伝統的なクレズマー音楽を聴く機会が極めて限られていること、国内のクレズマー音楽の演奏においてはその伝統を十分に踏まえない恣意的な解釈によるものが注目されやすい現状があることが挙げられる。それだからこそ、演奏家間での情報共有が喫緊の課題なのである。本研究では、この課題に応えるため、欧米の第一級の演奏家を招聘し、演奏家を対象としたワークショップの開催を計画した。その第一歩として、まず「音楽家のためのイディッシュ・ダンス・ワークショップ」を開催した。参加者は十数名と少人数ながら、積極的な姿勢での参加を得た。「ダンスの理解が演奏の質を向上させる」ことを体得してもらうことができた。また、演奏会ではこれまで演奏のみで紹介してきた各種ダンスについて、視覚的かつ聴覚的にそれぞれのダンスの特徴を理解してもらうことができた。さらに、欧米で主導されているクレズマー研究の最も先進的な成果を、生演奏を通して紹介し共有するという当初の目的も達成することができた。グラデコヴァ氏の参加により、これまで紹介できなかったイディッシュ・ヴァイオリンの響きを高い水準の演奏で直接伝えることができたことも本研究の成果として評価できる。

来場者の反応・反響

11月22日のワークショップ、および11月23日の演奏会終了後に行ったアフター・ミーティング(交流会)では、次のような感想があった。

ワークショップ

・従来は演奏のみ体験してきたが、初めて実際にダンスを体験してみて、各種ダンス音楽で各々どういった所にアクセントを置くべきかということが良く分かり、今後の演奏に生かしていきたい。

演奏会

・今回の研究発表会で初めてヴァイオリン(フィドル)が加入したことで、従来よりも

一層アレンジのバリエーションが豊かになり充実した内容だった。

・デジタル音楽隆盛の時代に、本来あるべき姿の音楽、記憶されていくべきものを間近に聴くことができたことは大変良かった。

・研究発表会には毎年来ているが、年々企画の充実度が増しており、新たな発見もあり、大変感動した。

両日ともに参加した聴衆からは、断片的に聴いたり演奏していた東欧ユダヤ音楽を、体系的に知ることができた、また非ダンス系の音楽の精神性にも生演奏を通して触れることができ、理解が深まった、といった感想が寄せられた。

(3)「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会 - シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.10 特別編」(2016年11月17日)

第1部は、樋上千寿率いるオルケステル・ドレイデルによる演奏で、クレズマーのダンス・ジャンルより「ホラ」「ブルガール」「シェア」および「ターキッシャー」の代表的な楽曲を解説付きで紹介した。そのほか、ハシディックの旋律をモチーフにした米国人クレズマー演奏家ジョシュア・ホロヴィッツ氏(Joshua Horowitz)の創作曲「The Master's Song」も演奏した。第1部の後半2曲は、今回ドイツより招聘したクレズマー演奏家、アラン・バーン博士(ピアノ)とマーク・コヴナツキー氏(ヴァイオリン)とともに、「ホラ」「ブルガール」「フレイラハス」をメドレー形式で演奏した。

第2部では、アラン・バーン博士とマーク・コヴナツキー氏によるデュオ演奏で、トラディショナルな楽曲を紹介した。我が国で世界最高クラスのクレズマー演奏家による生演奏を聴く機会は極めて珍しく、例年より多く集まった聴衆は、一音たりとも聴きもらさぬ、といった集中した姿勢で演奏に聴き入っていた。

フィナーレでは、再びオルケステル・ドレイデルのメンバーが合流し、全員で「シェア」を演奏し、舞踏家の吉田佐由美氏のリードで一部の聴衆がダンスを披露した。アンコールでは、アラン・バーン博士とマーク・コヴナツキー氏、樋上千寿が、「Ghost Light」を演奏した。イディッシュ民話には、ポグロムなどでの犠牲により、若い命を散らせた人々の魂が主要なモチーフの一つとして登場する。天寿を全うできなかった若い死者の魂に対する愛しみが込められた曲である。聴衆の一人からは、病のため20代で早世した嫁のことを想いつつ、拝聴しながら泣いたとの感想があった。震災などで子や孫を失った人々にとっても心に訴え掛ける名曲である。

終演後は、ロビーにて聴衆と出演者による質疑応答「アフター・ミーティング」を行った。30名以上の聴衆が参加した。聴衆からは、ホロコーストで伝承が断絶したクレズマー音楽を、バーン博士らがどのように再継承した

のか、という質問があった。親世代がすでに伝統から断絶していたバーン博士らは、1970年代にYIVO(N.Y.のユダヤ文化研究所)所蔵の録音資料などのアーカイヴに接したり、当時まだわずかに生き残っていた東欧から移住してきた世代のクレズマー演奏家の体験を聴いたりして、かつての伝統を取り戻す努力をしたとのことであった。そのほか、日本の古い流行歌に聞かれる旋律とクレズマー音楽との関わりについて聴衆から質問があった。主に白系ロシア人の演奏家らが戦前に日本にもたらした楽曲のなかに、クレズマーに擬した旋律が認められる。しかし、厳密にはそれらがクレズマー音楽として伝承されたわけではなく、旋法の面でもクレズマーのそれとは距離がある。それらの旋律の多くはロシア民謡などとして伝えられ、それを元に新たに日本人の手によって作られた楽曲のひとつである、と捉えられるべきである。そのほか、我が国でも馴染みの独立後のイスラエル国で聴かれるユダヤ音楽と、離散地で生まれた戦前のクレズマー音楽との間には、その成り立ちや受容環境などに大きな違いがある、とバーン博士は述べた。このように幅広い質問が寄せられ、聴衆のクレズマー音楽に対する関心の高さを感じさせた。

(4)「第1回 東欧ユダヤ音楽ワークショップ」(2016年11月18日~20日、各日10:30~17:45)

講師：アラン・バーン(アコーディオン、ピアノ)、マーク・コヴナツキー(ヴァイオリン、ダンス)、吉田佐由美(ダンス)

概要

日本で初めてとなる本格的な東欧ユダヤ音楽のワークショップを開催した。講師3名での体勢に、プロ、アマ演奏家のほか俳優、演出家など約20名の参加者があった。主に演奏家を対象としたワークショップだったが、授業はまず「歌うこと」から開始された。課題となった曲の多くはダンス曲だったが、各曲には「歌うメロディー」「踊るメロディー」そして「語るメロディー」の3つのメロディ・パートがあることが説かれた。1曲の中で、どのメロディーを「歌い」どのメロディーで「踊る」のか。そして、どんな物語を「語る」のか、それを念頭にフレーズを行うように指導された。このような音楽の捉え方は、クレズマー音楽に限らず、あらゆるジャンルの音楽についても応用できる。離散地のユダヤ人の生活は、常にホスト社会からの抑圧の中で営まれてきた。緊張を余儀なくされる日常の中で、人々の喜怒哀楽の振れ幅は、非ユダヤ人のそれとは比較にならない。他の音楽より増して感情表現が豊かなクレズマー音楽の成り立ちを理解することは、他のジャンルの音楽解釈にも非常に有効である。クレズマー音楽のほぼすべての曲において、記譜不可能なフレーズやリズムがある。

そのため、まず「歌う」ことで曲の成り立ちを理解しながらメロディーを記憶し、そのうえで初めて楽器を手にして演奏する、という手順を踏んだ。そうすることで、各曲のイメージは完全な形で共有され、物語が正しく継承されることになる。このような方法で曲の伝授が行われた結果、参加者はすべての曲を楽譜なしで記憶し、音楽のワークショップながら、譜面台は1台も必要なかったのである。こうしてクレズマーの代表的なダンス・ジャンル「ホラ」「ブルガール」「フレイラハス」そして「シェーア」に属する曲を数曲ずつ学んだあと、それぞれのダンスを実際に踊り、曲との関連を確認していった。自ら実際に踊ってみることで、各ジャンルのダンスにおいて演奏時に留意すべき点がさらに明らかとなるのである。

コミュニケーションの音楽

クレズマー音楽は、コミュニケーションの音楽である。それはダンスにおいてより明確に表れるが、演奏においても相互のコミュニケーションが必須である。各ダンスの特徴をよりよく出すためには、メロディー楽器、リズム楽器それぞれが各パートの役割を理解しながら、同じ一つの曲想を創りださなくてはならない。踊り手がアイコンタクトでコミュニケーションすると同様、演奏者間での役割分担が瞬時に行われるためには、やはり曲想を含めて曲を丸ごと記憶していることが前提となる。楽譜を一切使わない学習方法と、ダンスの実践とを組み合わせることで、クレズマー音楽の特徴を効率よく習得することができるのである。

ユダヤ教の中の音楽

クレズマー音楽のルーツのひとつは、シナゴークで朗読されるカントールの聖歌である。唯一神と人々との関係が常に意識されるユダヤ人の生活の中で、聖なる空間での朗読は特別な意味を持つ。歌詞の内容と、メロディーの成り立ちには密接な関係がある。端的な例では、神の名が歌われるフレーズは、その曲の中ではピークと重なり合う。神に対する崇敬の念と、曲のなかのクライマックスとが一致しているのである。授業では、ユダヤ教に関する詳細な解説はしないものの、宗教的生活と密接な関係を持つクレズマー音楽をよりよく理解するために必要な知識や歴史的背景について適切な講義が行われた。ユダヤ人の宗教的生活の中で育まれた精神文化としての音楽の本質を理解して初めて、クレズマー音楽を理解したことになるからである。

本質的な理解を目指して

以上のように、本ワークショップは単にクレズマーのレパートリーをたくさん覚えるだけのものではなく、むしろその本質的理解を目指したものとなった。ネットへの音楽配信

の普及により音楽そのものには触れる機会は増えても、それぞれの曲が持つ意味や、元々の役割、宗教的生活との関わりなどを知ることが難しい。この音楽が内包する精神性にまで踏み込んで、その理解を共有できた意義は大きい。さらに今回のワークショップで特筆すべきは、参加者の理解の早さと集中力の高さであった。それは、数多くの海外のワークショップで指導してきた講師たちが口を揃えて感嘆していた点である。参加者の理解度の高さが、わずか3日間のワークショップに、通常1週間ほどを要するコンテンツを充実させることを可能にしたのである。

クレズマー・コミュニティの形成

本ワークショップのもう一つの収穫は、プロ演奏家と今回の参加者を含めた、クレズマー・コミュニティが形成されたことであろう。従来、クレズマー演奏家は、個々の取り組みの中で個別に活動を続けていたが、本ワークショップを契機として、初めて彼らが一堂に会し、そして同じ情報に接し、クレズマーに関する共通理解を共有できた。日本でのクレズマー音楽を普及させていくための発信地が、ここに生まれたことは、本ワークショップの副産物という以上に有意義なものだったと言える。

(5)「第2回東欧ユダヤ音楽ワークショップ」
(2月19~22日、各日11:00~17:50)
講師：アラン・バーン（アコーディオン、ピアノ）、マーク・コヴナツキー（ヴァイオリン、ダンス）、吉田佐由美（ダンス）

東欧ユダヤ音楽（イディッシュ音楽、クレズマー音楽）の第一人者で演奏家・作曲家のアラン・バーン博士、マーク・コヴナツキー氏と、イディッシュ・ダンスの吉田佐由美氏をドイツから招聘し、東欧ユダヤ音楽の本質理解と普及を目的にワークショップを開催した。プロ、アマ演奏家や研究者など16名の参加を得た。本研究の長期的な目標は近現代の欧米の芸術に多大な影響力をもたらした東欧ユダヤ系芸術の本質理解である。美術であれ音楽であれ東欧ユダヤ芸術の源泉のひとつが東欧ユダヤ人の宗教的生活文化であり、その理解がシャガールを始めとする近現代ユダヤ系芸術の理解に有効である。本ワークショップは音楽を入口としてそこにアプローチしようとするものである。

講師のアラン・バーン博士らが特に目標としたのは、東欧ユダヤ音楽・舞踏におけるコミュニケーションの重要性と、東欧ユダヤ人の歴史・文化との関連についての理解であった。バーン博士は、礼儀作法や計画性を重んじる日本人の特性がかえってこの音楽に取り組むうえでの「障害」になりかねないと言う。というもこの音楽においてはそもそも楽譜を用いずその場その場で必要な演奏を瞬時の判断で演奏することが求められてき

たため、日本式の順序を踏む礼儀作法や計画性というものが入り込む余地はないからである。そのため演奏者は躊躇なく演奏するためのスキルを身に着けなくてはならない。ワークショップの前半はこのスキルアップのためにバーン博士氏が考案したエクササイズを繰り返した。即興的な演奏を行うには特徴的な語彙をできるだけ多く知っておく必要があるが、参加者は幾つかの限られたフレーズだけを用いてサッカーのパス回しのようなやり取りを行い、コミュニケーションの取り方を学んだ。ダンスでもやはり表現のための語彙力を身に着けることに重きが置かれた。東欧ユダヤの舞踏ではいわゆる振付けはほとんどなく、シンプルなステップを踏みながら自らを輝かせる「シャイン」の場での即興的な自己表現が特徴的だからである。演奏の即興性はダンスの即興性とも深く関わり合いながら、両者は一体の表象として成り立っていることが理解できる授業内容であった。

(6)「東欧ユダヤ音楽クレズマー演奏会 - シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.11 特別編」(2月23日)

イスラエルで継承されてきたクレズマー音楽は東欧で伝承されたクレズマー音楽とは発達の間緯に大きな相違がある。演奏会前半では同じハンディックの旋律をベースとしながらも両者にはレパートリーやリズムの解釈に大きな隔たりがあることを演奏と解説を通して紹介した。またバーン博士とコヴナツキー氏による演奏が行われ、聴衆は日本では滅多に聴く機会のない世界トップレベルのクレズマー音楽を堪能した。後半はワークショップ参加者による演奏とダンスを行い、聴衆も巻き込んでの成果発表を行った。終演後は主催者および講師陣と聴衆との間でアフター・ミーティングを行い、質疑応答の場を持った。バーン博士が関わった1980年代の米国でのクレズマー・リバイバルやロシアでのイディッシュ文化の現状などについて質疑が交わされた。またシャガールの芸術とクレズマー音楽との関連についての質疑もあり、聴衆の関心の高さと深さを感じた。

成果

本研究は2015年度にダンスの吉田佐由美氏を招聘して開催した「音楽家のためのイディッシュ・ダンス・ワークショップ」、2016年度に今回と同じ講師陣で開催した「第1回東欧ユダヤ音楽ワークショップ」に連なるものである。本格的なクレズマー音楽に接する機会が極めて少ない我が国において、世界の第一線で活躍中の演奏家らによる体系的な指導とハイレベルな演奏に触れる機会を創出することは喫緊の課題である。最終年度は、前年度開催のワークショップより2日間多い5日間としたことで、よりきめ細かな指導と多くの情報共有を行うことができた。

クレズマー音楽にはダンス・ジャンルとノン・ダンス・ジャンルとがあるが、前者についてはダンスとの関連を強く意識しつつ楽曲の理解を促進することができた。後者の多くは宗教的な儀式に深く関連している場合が多いため、ベースとなっている聖歌（ユダヤ教の場合はカントール音楽）との関連や、聖歌に込められた意味などについての理解も共有できた。クラシック音楽を専攻してきた演奏家にとっては楽譜をもとに楽曲を理解することが常識であるが、クレズマー音楽は元来楽譜を用いず耳から耳へと伝えられた師資相承の伝統音楽であるため、ワークショップでは必要な場合を除いて一切の楽譜を用いず楽曲の習得が進められた。参加者のなかにはクラシックの演奏家も少なくなかったが、この方法でジャンルごとの代表的な楽曲を旋律だけでなく、記譜が極めて困難な特徴的な装飾音なども含めて丸ごと記憶することができた。最初から暗譜することで、音符に捉われることなく自由な表現に意識を集中させることができる。クレズマー音楽の場合は基本となる旋律を繰り返す際に必ずバリエーション（変奏）を付けることが求められる。楽譜を忠実に再現することに慣れている演奏家にとっては、この作業は容易いものとは言えず戸惑う参加者も少なくなかった。しかし、そのような体験も経ることでクレズマー音楽の本質理解にさらに一歩近づくことができただろう。クレズマー音楽の普及がいまだ不十分であることも影響して、参加者数は定員（40名）には及ばなかったが、日本人に馴染みのない東欧ユダヤ文化についてのやや難解な講義や特徴的な奏法などについて十分に理解を共有するには適切な人数だったと言える。

来場者の反応・反響

参加者の中にはクレズマー音楽に関心はあってもその背景文化やダンスに込められた意味などについての知識を持ち合わせず、印象だけを頼りに演奏を続けてきたケースが多かったようだが、そこに理論的な裏付けが得られたという感想が多かった。それはまさに本ワークショップが意図していたことでもある。演奏家を主な対象とした音楽ワークショップでダンスの習得にかなりの時間を割くことに理解が得られるかという懸念はあったが、第1日目から参加者はダンスの理解にも高い集中力を発揮し、講師が驚くほどの速さで習得していた。むしろ参加者のほうからダンスの授業を継続するよう要望があったほどである。すべての参加者が本ワークショップの継続開催を強く望んでいた。聴衆からの質疑に答えるアフター・ミーティングでは前述の通りクレズマー音楽の歴史と現状に関わる本質的な質問が相次ぎ、質疑の時間は1時間に及び白熱したものとなった。

5. 主な発表論文等

(1) 成果発表会

上述したものを除く

「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.9」京都公演、2015年10月24日、京都市国際交流会館イベントホール

樋上千寿、三代真理子、松本操子、大橋祐子、高橋延吉、アンナ・グラデュコヴァ

「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.10」京都公演、2016年10月22日、京都市国際交流会館イベントホール

樋上千寿、大橋祐子、高橋延吉

「東欧ユダヤ音楽・クレズマー演奏会：シャガールが愛した、故郷の旋律 vol.11」京都公演、2017年11月23日、京都市国際交流会館イベントホール

樋上千寿、大橋祐子、高橋延吉、秦宏太郎

「東欧ユダヤ音楽・クレズマー特別公演 in 京都」

2018年2月17日、京都岡崎ナムホール

樋上千寿、アラン・バーン、マーク・コヴナツキー

(2) 招待講演および演奏

ポーラ美術館開館15周年記念展 ピカソとシャガール「愛と平和の讃歌」関連イベント「シャガールが描いた音楽」講演と演奏
2017年5月3日、ポーラ美術館（箱根）

樋上千寿、高橋延吉、秦宏太郎

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋上千寿 (HINOUE, Chitoshi)

研究者番号：30608740

(4) 研究協力者

国内

アンナ・グラデュコヴァ (GLADKOVA, Anna)

大橋 祐子 (OOHASHI, Yuko)

高橋 延吉 (TAKAHASHI, Nobuyoshi)

秦 宏太郎 (HATA, Koutarou)

松本 操子 (MATSUMOTO, Misako)

三代 真理子 (MISHIRO, Mariko)

海外

アラン・バーン (BERN, Alan)

マーク・コヴナツキー (KOVNATSKIY, Mark)

吉田 佐由美 (YOSHIDA, Sayumi)